

新しい専門員が着任しました！



金田 皓樹（かねた・こうき）さん（秋田県秋田市出身）

専門は防災教育で、地学的な理解をより深めるため、ジオサイトを活用したモデル実験に用いる教材開発に携わってきました。大学ではマール（水蒸気爆発等で形成される円形の火口）や爆裂火口等の火山地形や断層、土地の隆起について小中学生の理解を高めるためモデル実験を行い、その効果を実証しました。

皆さんと一緒に、ジオパークでの活動を盛り上げていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

今月号は、洞爺湖有珠山ジオパークの構成市町の1つ、壮警町の取組をご紹介します。

～ 壮警町の取り組み紹介 ～

壮警町では、有珠山や昭和新山など、活火山の見どころを町づくりに生かす取り組みが続けられています。その中心となっているのが昭和新山です。

1943年12月、有珠山の北山麓で始まった地震は、翌月になると徐々に位置を変え、東山麓で大地の隆起が始まります。畑や民家、線路があった場所が盛り上がりはじめました。6月にはフカバ集落の近くの畑から水蒸気爆発が起こります。10月末までに十数回の爆発を繰り返し、火砕サージも発生しました。大地の隆起は続き、畑だった場所が海拔250m程の潜在ドーム（上昇してきたマグマが地表に出ずに地面を押し上げてできた地形）になります。これが屋根山と呼ばれている、昭和新山の下部分です。1944年12月、屋根山中央の火口群の中心から三角形の溶岩ドームが現れました。これが現在も赤い天然レンガに覆われている、昭和新山の上部分になっていきます。屋根山も、その上に現れた溶岩ドームも1945年9月まで成長を続け、海拔407mの昭和新山となりました。

火山の成長記録が残されている例は、世界でも非常に稀です。観察を続けた、当時の郵便局長三松正夫（みまつ・まさお）さんは、昭和新山の保護・保全にも力を尽くし、現在その記念館が昭和新山の麓にあります。



NPO 法人 有珠山周辺地域ジオパーク友の会

火山と共生するふるさとを学び、地域文化の伝承、地域の魅力の発信、ガイド活動、人事育成と交流の促進等を実施することで、ジオパーク及びエコミュージアムの推進、地域の活性化を目指しています。現在会員は約170名で、大地の見どころを学び楽しむ事業を行っています。